童心帖

半世紀を経てよみがえる幻の作品群

波田で公開中

安曇村橋場の木版画家・加藤大道（1896―1965年）と、「春よこい」などの作詞で知られる詩人・相馬御風（1883―1950年）が共同制作を計画しながら、御風の死で未完に終わった「童心帖（どうしんちょう）」。その一部が、大道作品の常設・企画展示を行う波田町上赤松の「カフェブレイエル&ギャラリーやましろ」で公開されている。大道を愛する人たちの手により、55年の歳月を経て、幻の作品群が初めて姿を現した。

（松尾尚久）

安曇の木版画家・加藤大道

展示されているのは、「春がゆく」「雪の足あと」「雪だるま」「歌すき鳥」「月のうさぎ」「月夜」の6作。子供と自然を叙情豊かに表現した版画と詞が、見る者の心を温める。

御風の童謡に大道が版画をつけ、40作ほど集めて出版する計画だったが、2人が交流を持ち始めてわずか2年後に御風がこの世を去り、童心帖は世に出ずに終わった。

中心になって動いたのは、プレイエルを経営する古畑博子さん。古畑さんが2人の交流を知ったのは一昨年で、別の企画展準備のため資料を整理しているうちに、大道が書いた「なお相馬御風先生との関係は…」で始まる短い文章を見つけた。

「相馬先生の信州における作歌に、私が木版手摺（てずり）の挿画をして発行するというまでに話が進んでいたのでありますが、遂（つい）にその実現を見ずに終わったということは、まことに残念なことであります」

昨秋、古畑さんは2人の交流の足跡をたどり始めた。

まず、大道の長男で、2代目を襲名する加藤重治さん（76）＝松本市中上＝を訪ね、手持ちの大道作品の中から「童心帖」のために作った作品を探してもらい、6作を発見。

次に、地元の書店へ駆け込み、御風の本をリストアップ。松本市中央図書館で、童謡集「銀の鈴」から、絵の内容と合った4編の詩を見つけ、残り2編は、新潟県糸魚川市の歴史民俗資料館内の相馬御風記念館に問い合わせて探し当てた。

さらに、大道が御風にあてた手紙の解読を重治さんに依頼。そこには、自分の版画を評価してくれた御風への感謝の言葉のほか、いつ失明するか分からない自分の病状への不安、「たとへ一枚でも多くつくり、子供の一人をよろこばすことができたら」など、版画制作への意欲がつづられている。

大道は同時期に、「長崎の鐘」などの著書で知られる医学博士・永井隆（1908―1951年）と、「原子野の花」と題した本の制作を進めていた。大道の作品が、いずれも晩年の大人物の心をつかんだことに古畑さんは注目。「大道版画の精神性の高さを証明しているのでは。童心帖の作品がまだあるのか、楽譜は残っているのか、これからも探していきたい」と話す。

展示は年内いっぱい続ける予定。営業時間は午前10時―午後4時半。水木金曜定休（3月まで）。3月27日には、午後2時からと7時からの2回、「〝春よこい〟ピアノと歌声のコンサート」を同店で開く。3000円。☎92・8158

制作に励む加藤大道

大道の作品を高く評価していた相馬御風（糸魚川市歴史民俗資料館所蔵）

展示6作品の中から3作品を、御風の詞と共に紹介する。

雪の足あと
（作曲・農業完全）

ひ、ふ、み、よ、
い、む、な、
ここの、とを、

白い、
たひらな
雪のうへ。

かぜへ
かぜへて
つけてゆく。

わたしの
ちひさな
靴のあと。

わたしの
足あと
くつのあと。

歌すき鳥
（作曲・不明）

山のはたけの
柿の木に
鳥が三羽
とまった。

一羽の鳥は
柿がすき
一羽の鳥は
栗がすき
一羽の鳥は
豆が好き。

三羽そろって
すきなのは
朝夕うたふ
歌ばかり。

春がゆく
（作曲・中山晋平）

アデッポッポー
アデッポッポー
どこで啼（な）くのか
山鳩が
しづんだ、ふとい
なきごゑで
をかしいやうに
時にまた
あはれなやうに
うたひます。
もうぢき春が
ゆくのでせう。

アデッポッポー
アデッポッポー
とほい山には
雪がまだ
白く光って
ゐるけれど
うらの山には
きのふけふ
やるせもなけに
鳩がなく。
もうぢき春が
ゆくのでせう。

幻の「童心帖」発見

安曇の木版画家 加藤大道の作品6点

御風と共作するも未完

波田で展示

制作中の加藤大道

安曇村橋場の木版画家・加藤大道(1896－1965)が、良寛研究で知られる詩人の相馬御風(1883－1950)の童謡に版画をつけ、『童心帖(ちょう)』と題して出版する計画があったものの、御風の死で6作彫って打ち切りになっていたことが、このほど分かった。6作が波田町上赤松の喫茶「カフェ プレイエル」のギャラリーで初めて公開され、話題を呼んでいる。

〝幻の童心帖〟とも言える大道と御風の共作が公開されているギャラリー

大道の長男で、二代目を襲名する加藤重治さん(七八)＝松本市中上＝の記憶を頼りに、新潟県糸魚川市の相馬御風記念館に問い合わせ、六作が判明した。

「春がゆく」「雪の足あと」「雪だるま」「歌すき鳥」「月のうさぎ」「月夜」の六作。いずれも御風が童謡として作詞し、中山晋平(中野市出身)らが作曲している。この童謡に大道が独特の素朴なほのぼの温かい子どもたちの版画を制作した。

計画では御風の童謡三十―四十編に、大道が版画を彫って『童心帖』として刊行するつもりだったが、昭和二十五(一九五〇)年五月、御風が急死したため、幻の童心帖となってしまった。

大道と御風の交流は昭和二十三年三月、大道が御風に手紙を送ったのが始まり。それ以前に御風が大道作品を幾度か見て、心を打たれた旨を第三者を通して大道に伝えていた。

「山国の美しさ、純真でしかも詩味豊かな山国のこどもの生活、素朴なうちに限りない情趣を蔵した山村の風物が澄んだ美しい色彩と力強く且(か)つ柔か味のある線とで、いみじくも描き出されている」の御風の文章も残されている。

六作のうち「月夜」は、月がさえ渡る夜、二階家の障子戸を開けて子どもが顔を出し、雪の積もった山と木々を見ている作品で、御風の詩「ふみ読みさめて／そゞろ開く窓の障子／心もさやかに／清く澄める大空―」の情景を素直に彫り上げている。

昭和二十三年は大道が、長崎の原爆で被爆した医学者・永井隆と交流し、作品集『原子野の花』を共作した時期とも重なる。

大道作品の保存と展示に力を入れ、重治さんと親しい「カフェ プレイエル」の古畑博子さんは「未完には終わったけれど、大道のやさしさ、愛に、内省の人である御風が打たれ、味わい深い作品が生まれたことがうれしい」と話している。

問い合わせは同ギャラリー(電話92・8158)へ。水、木、金曜日は休み。

相馬御風(ぎょふう) 明治・大正期の詩人、文芸評論家。本名は昌治。『早稲田文学』の編集に参加し、三木露風らと「早稲田詩社」を設立。郷里の糸魚川に退いて良寛の研究に打ち込み、『大愚良寛』などを著した。「早稲田大学校歌」「カチューシャの唄」「春よこい」などの作詞者としても知られる。

平成17年(2005年)
(第三種郵便物認可) 1月15日(土)

市民タイムス